様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２３５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２２０５

研究課題名（和文）急性期病院看護師の認知症ケア研修体制の構築

研究課題名（英文）Construction of dementia care training system for acute hospital nurses

研究代表者
小山　尚美（Koyama, Takami）

山梨県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：８０４０５１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：認知症対応力向上研修を修了した急性期病院看護師を対象に、生活の場での認知症ケア体験を組み込んだ研修を企画・実施・評価するとともに、研修での学びの活用状況を調査した。その結果、体験研修での実感を伴った学びは急性期病院での認知症看護の再考につながっていたが、こうした研修成果が急性期病院での認知症看護実践に結びつくか否かは組織の風土に影響されることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
急性期病院に入院する認知症高齢者数の増加に伴い、認知症ケア加算等の制度が開始されているが、依然として課題が山積している。我々は、認知症対応力向上研修修了者を対象に、介護保険施設での認知症ケア体験研修を実施し、研修参加者の学びを分析した。その結果、体験研修は認知症看護の実践的な知識を習得する機会・急性期病院の認知症看護を再考する機会となっていたことが明らかとなった。その後、研修修了者の認知症看護実践に関する調査を実施したところ、組織が認知症看護実践を支援することで実践が促進されることを明らかにした。研修内容が急性期病院での認知症看護実践に結びつくかは組織風土に影響を受けることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In the present study, a training program incorporating dementia care experiences in patients’ daily life situations for acute care hospital nurses following the completion of dementia care training was planned, conducted, and evaluated. Nurses’ utilization of what they learned during the training was also examined. The realistic learning that occurred during experiential training led to a rethinking of dementia nursing in acute care hospitals. However, the organizational culture influenced whether these training outcomes were reflected in actual dementia nursing.

研究分野：老年看護学

キーワード：急性期病院　認知症ケア　研修

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2000 年の介護保険制度の制定以降、わが国の高齢者福祉では、認知症高齢者の尊厳と人間性の回復をめざし、その人がもつ心身の力を最大限に発揮した充実した暮らしが出来るように取り組んできた。その結果、認知症ケアの経験は介護保険施設で積み上げられ質の向上が図られている一方で、医療機関の看護師には情報が不十分である点が指摘されていた（諏訪 2006）。そこで我々は、一般病棟の看護師を対象に認知症高齢者のケアにおける困難について半構造化面接を行い質的に分析した。その結果、看護師は「通常と違う看護への戸惑い」や「一般病棟の条件に起因する困難」「安全な医療提供に対する困難」を感じ、これらの困難から「看護師としての職務葛藤」「看護師であるがゆえの困難」が生じていることが明らかになった（小山ら 2012,2013）。看護基礎教育の看護学実習で学生が認知症高齢者を受け持つ場合、その場所は介護施設や認知症グループホームが中心であり（堀内 2010）、急性期病院における認知症看護については現任教育に頼らざるを得ないのが現状である。しかしながら、認知症看護に関する院内教育は、まだまだ質・量ともに不十分であり、認知症と診断があると入院時に身体拘束の承諾書が家族に依頼され、点滴治療の看護として身体拘束が必須になっている場合や、安全管理を目的として安易に向精神薬の投与が実施されている（鈴木ら 2015）。また、急性期病院等では、認知症の人の個別性に合わせたゆとりある対応が後回しにされ、身体合併症への対応は行われても、認知症の症状が急速に悪化してしまうような事例も見られる（厚生労働省 2015）。こうしたなか、急性期病院における認知症高齢者の看護実践に関する研究（鈴木ら 2015,天木ら 2014）が見られるようになり、徐々に一般病棟における認知症ケア改善に向けた具体的な方法・教育プログラムが明らかにされつつある。厚生労働省は、身体合併症対応等を行う医療機関での認知症対応力の向上を図る観点から、「看護職員の認知症対応力向上研修（仮称）」について、平成 27 年度に研修のあり方について検討、平成 28 年度から関係団体の協力を得て研修実施している（厚生労働省 2015）。我々はこれに先駆け地域中核病院の看護師 143 名を対象に、認知症対応力向上研修会を実施し、その評価を実施した（小山ら 2016）。この中で、研修会参加者は認知症の人への対応の原則は理解できたが、緊急度の高い患者や病棟業務を抱える状況下で認知症高齢者を尊重した対応を行うことが本当に実践可能なのか、自己のこれまでの経験から不安を抱いていたことを報告した。犬塚は、体験学習では、みずからの身体や心、知能や感覚など自分のすべてを駆使して学習することで、“ 知る，わかる ” レベルから “ 実感できる，実際に感じて理解できる ” レベルに到達できるとしている（犬塚 2000）。先に述べた認知症対応力向上研修会は、知識レベルでの学習であり、認知症ケアの知識を “ 活きた知識 ” として習得するためには、認知症高齢者の言動を知識と関連づけてアセスメントする体験学習が必要と考える。流石らは、地域住民を対象とした認知症ケア啓発では、講義形式での理解に留まらず、認知症高齢者と直接触れ合うなかで、その人に表れている日常生活に関連した症状・行動の知識を関連づけて伝えることで、活きた知識の習得が可能となると報告している（流石ら 2010）。長寿化に伴い認知症を抱えながら身体疾患の治療を受ける高齢者が増加している中、急性期病院の看護師が認知症高齢者の受け持つ機会は日常となりつつある。しかし、先行研究（小山ら 2012,2013）から一般病棟では、看護師は認知症高齢者にゆっくりと向き合って看護を行っているとは言い難い状況が推察され、認知症高齢者を “ 患者 ” ではなく “ 生活者 ” と捉えてケアを提供している介護保険施設などの生活の場におけるケア体験が、急性期病院の看護師の認知症ケアの理解にとって必要であろう。しかし、急性期病院の看護師を対象に介護保険施設での認知症ケア体験を研修として実施した報告はみあたらない。そこで、認知症対応力向上研修会を修了した急性期病院の看護師を対象に、介護保険施設での認知症ケア体験を組み込んだ研修を企画・実施・評価し、急性期病院の看護師向けの認知症ケア研

修について考察するとともに急性期病院における認知症ケア研修体制の構築を図ろうと考えた。

２．研究の目的

認知症対応力向上研修会を修了した急性期病院の看護師を対象に、介護保険施設など生活の場での認知症ケア体験を組み込んだ研修を企画・実施・評価を行う。これをもとに、急性期病院の看護師向けの認知症ケア研修について考察するとともに急性期病院における認知症ケア研修体制の構築を図る。

３．研究の方法

本研究は以下の3つの研究を段階的に実施した。

研究１：認知症対応力向上研修を修了した急性期病院看護師を対象に、介護保険施設での「認知症ケア体験研修」を企画・実施し、研修での学びを分析した。

研究 2：「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の認知症看護実践の様相を分析した。

研究３：認知症ケアの質向上の取り組み実績のある地域中核病院（A 病院）の認知症ケアの質向上に向けた組織づくりの現状と課題を明らかにした。

（1）研究１：介護保険施設での「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の学び

①「認知症ケア体験研修」の企画・実施

研修の目的は、「認知症対応力向上研修会での学習内容をふまえ、高齢者にとっての生活の場である介護保険施設に入所する高齢者へのケアを体験することで、認知症の人の理解を深め、その人の身体・心理・社会面及びスピリチュアルな面も含めて包括的にアセスメントすることで看護の方法を再確認し、急性期病院での認知症看護について考察する」とした。研修対象者は B 県内の地域中核病院（A 病院）に勤務する認知症対応力向上研修会を修了した看護師で本研究への同意を示した 10 名。研修内容は、介護保険施設オリエンテーション（2 時間程度：10 名同時に実施）と認知症ケア体験（10 名を 3 グループに振り分け、延べ 3 日間実施）とした。認知症ケア体験では、C 介護保険施設の朝礼に参加後、施設で生活する利用者の中から、受け持ち高齢者を決め、情報収集後、日常生活援助を施設職員と共に実施した。また、認知症ケア体験後、研修生は「研修での学び」を記載し、その後、当日の研修生全員（3～4 名）でカンファレンスを 60 分程度実施し、学びの共有を行った。

②「認知症ケア体験研修」の学びの分析

研究対象者は認知症ケア体験研修受講者で本研究への同意を示した 10 名。研修生が記載した「研修での学び」を精読し、内容が一文一義であるように記述を区切り、一記録単位とし、さらに個々の記録単位を内容の類似性により帰納的に分類・抽象化・カテゴリ化し、最後に同一記録単位群・カテゴリに分類された記録単位の出現頻度・比率を算出した。なお、結果の信頼性を確保するために、自由記述から記録単位とその解釈およびカテゴリ化では、共同研究者間で意見が一致するまで行った。また、認知症ケア体験研修のカンファレンス内容を、参加者の承諾を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語化したデータを研究者間で繰り返し読み、本研修会を通した認知症ケアの理解について語られている部分を中心に抽出しコードを作成した。その後、コードの相違性・類似性・に基づき比較しながらサブカテゴリ・カテゴリへと抽象度を高めた。なお、分析結果の信頼性・妥当性を高めるため、一連のプロセスは、共同研究者間で意見が一致するまでディスカッションを繰り返し、分析を行った。

（2）研究 2：介護保険施設で「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の認知症看護実践の様相

研究対象者は「認知症ケア体験研修」を修了した全看護師のうち、本研究への同意を示した10名。研究者がインタビュアーとなり、インタビューガイドを用いた半構成的インタビューを実施した。対象者から、基本的属性について聴取するとともに、1名につき40～60分程度のインタビューを1回実施した。対象者に認知症ケア体験研修後に一般病棟で認知症高齢者のケアを行った体験を想起してもらい、体験研修での学びを日々の看護にどのように活用しているのか、その活用状況と関連要因について自由に語ってもらった。インタビュー内容は対象者の承諾を得てテープに録音し、逐語録を作成した。逐語録より、認知症ケア体験研修での学びの活用状況及び関連要因が表現されている部分をデータとして抽出した。データはひとつの意味内容ごとに、できる限り本人の発言を用いてコード化し、コードの類似性・相違性を検討しながら、活用できている学び・活用できていない学びとその要因について、それぞれサブカテゴリ・カテゴリへと抽象度を高めた。なお、結果の信頼性・妥当性を高めるため、一連のプロセスは、質的研究の経験者を含む共同研究者間で意見が一致するまでディスカッションを繰り返し、老年看護学の研究者よりスーパーバイズを受けながら分析を行った。

（3）研究 3：急性期病院における認知症ケアの質向上に向けた組織づくりの現状と課題

認知症対応力向上研修や認知症ケア体験研修など、認知症ケアの質向上に向けた取り組み実績のある地域中核病院（A 病院）の中堅看護師および中間看護管理者（産科病棟、小児科病棟等、認知症ケアが日常業務とはならない部門に所属する者を除く）178 名に、無記名自記式質問紙調査を依頼した。調査内容は基本属性、認知症ケアの質向上に向けた組織づくりの取り組み状況（24 項目）、認知症ケア実践で問題となる状況（13 項目）とした。分析は、組織づくりに関する取り組み状況と認知症ケア実践で問題となる状況について単純集計を行った。また、問題となる状況の有無で 2 群に分け、所属部門の特徴などを $\chi 2$ 検定で比較した。

４．研究成果

（1）研究 1：介護保険施設での「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の学び

研修生が記載した「研修での学び」を分析したところ、128 記録単位から 24 サブカテゴリが形成され、最終的に【医療者主体の思考になっていたことへの気づき（28.9%）】【全人的理解に基づいた看護の必要性（23.4%）】【本人の感じている不安を知り援助に生かすこと（20.3%）】【その人が安心できる関わり方のポイント（14.8%）】【その人らしい生活支援のための連携の重要性(7.0%)】【認知症の症状や病態(3.1%)】【高齢者の身体的特徴と予防的介入の必要性(2.3%)】の 7 カテゴリに集約された。また、カンファレンス内容を分析した結果、197 のデータから 51 コード 22 サブカテゴリが形成され、【その人の不安な思いをとらえ安心につなげる援助の重要性】【その人を多面的に捉えた個別性のある看護の重要性】【その人らしい生活を継続するための連携の必要性】【医療者主体の思考を再考する機会】【高齢者の特徴を意識した身体合併症予防の関わりの必要性】の 5 カテゴリに集約された。

以上より、急性期病院看護師が介護保険施設という生活の場で認知症高齢者のケアを体験することは、認知症ケアに関する実践的な知識を習得し、急性期病院における認知症高齢者へのケアを再考する機会となることが示唆された。

（2）研究 2：介護保険施設で「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の認知症看護実践の様相

対象者 10 名のインタビュー内容を分析した結果、以下の結果を得た。【体験研修での実感を伴った学び】があることで、看護師は【認知症高齢者の立場に立った安心につながる看護】、【身体拘束をせず安全に過ごせるための看護】、【その人らしい生活が継続できるための連携】を行い、【認知症看護の実践による手応え】を得ていた。これは認知症高齢者への看護や必要な連携を強

化するだけでなく【認知症看護の質向上に向けた主体的な発信】を支えるものとなっていた。また、認知症看護実践には【認知症看護を実践しやすい雰囲気やシステムの存在】が必要で、実践により更に強化されていた。

以上より、認知症看護実践の促進は体験研修受講者の立場や組織のあり方に左右されることが示唆された。

（3）研究 3：急性期病院における認知症ケアの質向上に向けた組織づくりの現状と課題

90 名の回答が得られた（回収率 50.5%）。組織づくりの取り組み状況では、「認知症ケアへのスタッフの相談に応じる」「カンファレンスで認知症ケアをスタッフ全員で考える」「認知症者の安全保持物品の備え」が 7 割以上であったが、「スタッフの認知症ケアに対するリフレクション」「認知症ケアの面白さを語れる雰囲気づくり」「認知症者の安寧を考慮した院内の居場所の確保」「患者の認知機能の判断基準を設定」は 2 割～3 割であった。認知症ケア実践で問題となる状況は、「認知症ケアに自信のないスタッフが多い」「治療が優先され認知症ケアの優先順位が低くなる」「認知症者を担当することの負担感があるスタッフが多い」「認知症者は身体拘束で安全を守るという雰囲気がある」で 6 割以上があると回答していた。一方、「認知症の専門知識を持つ者との連携がとりにくい」「認知症ケアを発信しても受け取られにくい」は 2 割未満であった。所属が病棟と回答した 51 名について、問題となる状況の有無別に病棟の特徴を見たところ、「認知症ケアに自信のないスタッフが多い」は、「モニター装着をしている患者」が常に複数名いる病棟で有意に多かった。「治療が優先され、認知症ケアの優先順位が低くなる」は、「他部門への送迎が必要な患者」「モニター装着をしている患者」「予定で入院する患者」が常に複数名いる病棟で有意に多かったが、「緊急で入院する患者」が常に複数名いる病棟では有意に少なかった。さらに、「認知症者を担当することの負担感があるスタッフが多い」は、「周手術期の患者」「モニター装着をしている患者」「クリティカルパスを使用している患者」「他部門への送迎が必要な患者」が常に複数名いる病棟で有意に多く、「急変する患者」が常に複数名いる病棟では有意に少なかった。「認知症者は身体拘束で安全を守るという雰囲気がある」は、「他部門への送迎が必要な患者」「モニター装着をしている患者」「ドレーン類を装着している患者」が常に複数名いる病棟で有意に多かった。

以上より、認知症ケアの質向上に向けた取り組みにより、A 病院は認知症ケアへの士気が高いことが窺えるが、急性期病院では治療・安全が優先されやすい傾向があり、認知症者が安心して治療が受けられる物理的な環境が整っていない現状があると推察された。また、看護師間での認知症ケアに対する肯定的な対話の不足が、看護師の認知症ケアへの負担感・自信のなさに繋がっているものと考えられた。さらに、病棟の特性として、日常的に臨機応変・柔軟な対応が求めらる病棟では、認知症ケアで問題となる状況が生じにくいことが窺え、ドレーンやモニター装着をしている認知症患者は身体拘束で安全を守るという組織風土が存在することも窺えた。認知症ケアの質向上に向けた組織づくりでは、認知症者にとっての安心・安全を保証する物理的環境整備と、看護師間の認知症ケアへの肯定的対話が求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小山尚美、渡邊裕子、流石ゆり子	４．巻 24(1)
２．論文標題 介護保険施設で「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の認知症看護実践の様相	５．発行年 2019年
３．雑誌名 老年看護学	６．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小山尚美、流石ゆり子、渡邊裕子	４．巻 23（1）
２．論文標題 介護保険施設での「認知症ケア体験研修」を受講した急性期病院看護師の学び　ケア体験終了時のカンファレンス内容の分析より	５．発行年 2018年
３．雑誌名 老年看護学	６．最初と最後の頁 121－128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小山尚美，渡邊裕子，流石ゆり子
２．発表標題 急性期病院における認知症ケアの質向上に向けた組織づくりの現状と課題-中堅看護師・中間看護管理者を対象とした質問紙調査より-
３．学会等名 日本老年看護学会第24回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小山尚美，渡邊裕子，流石ゆり子，茅野久美，松田恵理
２．発表標題 介護保険施設での「認知症ケア体験研修」の学びの活用状況とその要因（第1報）-急性期病院の看護に活用できている学びとその要因-
３．学会等名 日本老年看護学会第23回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 流石ゆり子，小山尚美，渡邊裕子，茅野久美，松田恵理
２．発表標題 介護保険施設での「認知症ケア体験研修」の学びの活用状況とその要因（第2報）-急性期病院の看護に活用できてない学びとその要因-
３．学会等名 日本老年看護学会第23回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡邊裕子，小山尚美，流石ゆり子，坂本律子
２．発表標題 「認知症対応力向上研修」修了者が「認知症ケア体験研修」で得た学び 第1報　“ 研修での学び ” の記載より
３．学会等名 日本老年看護学会第22回学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 小山尚美，渡邊裕子，流石ゆり子，坂本律子
２．発表標題 「認知症対応力向上研修」修了者が「認知症ケア体験研修」で得た学び 第2報　ケア体験後のグループインタビューより
３．学会等名 日本老年看護学会第22回学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡邊　裕子 (WATANABE Yuko) (40279906)	山梨県立大学・看護学部・教授 (23503)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	流石　ゆり子 (SASUGA Yuriko) (70279892)	山梨県立大学・看護学部・副学長 (23503)	